第一人生観の成立

——第三の人生観（二）——

金子大榮

第二回目は、「第一人生観の成立」という講題にいたしておきましょう。第一人生観というのは、道は自然に従うことである。自然の大道ということがある。そして、それは、昨日も申しましたように、私たちが青年時代から育てられてきたことでもあり、あるいは、明治時代の教育がそうなっていたと言ってもよいかもしれない。しかし、もっと強く申しますと、それは曾我量深の思想である。こうも言っていいわけであります。

今日話そうと思うことは、三つほどあるのですが、第一には悠久無限の感情。宗教といえば、無限なるものに帰依するということでありますが、その悠久、あるいは永遠、永遠無限という感情。それを、どこで育てられたかということから話しておきましょう。

昨日も少し申しましたように、皆がそうであるかどうかわかりませんが、ともかくも、北越に生まれた私たちは、悠久無限なるものという感情を育てられてきたようであります。そして、その無限感情というものを与えた第一のものは、山河大地であるといってよろしい。大いなる山、それから海。山と河。山河草木ということがありますが、その山河が無限の感情を与える。

山と申しましても、いろいろあります。私は北国に生まれたものでありますが、ことに哲学的な思想、偉大なるも

のという感情を与えられたのは、北国の山河というよりは、ことに隣の国の長野県であったと思います。長野県人は今ではどうか知りませんが、とにかく思想的でありまして、あそこからいろんな思想家が出ているということもあります。私は、親戚の関係がありまして、今でも思い出しますが、島崎藤村の詩集を手に持って、そうしてあの佐久の山河、千曲川のほとりをずっと歩いたことを思い出すのです。そして、山河は偉大なるものであるということにおいて、無限なるものという感情が育てられたようであります。それで、京都に住むようになりますと、東山三十六峰ということになるのですが、あまり無限という感じは与えられません。やはり田舎育ちの人であるならば、あの山あの川というものを、みなさんでも思い出されるのではないですか。そこに無限なるものという感情、思想というよりは感情を養われたのであります。

それからもう一つは海。この海も、南海と北海ではよほど感じが異なるのではないかと思います。北の海というものは、それはもう嵐の時には、大波で潮を洗います。私のいるところは二里も三里も海岸から離れているのですけれども、轟々と鳴る海、海の音が聞こえるのであります。平和な時には、またうって変わって静かなのですが、その海岸を散歩している時に悠久無限ということを感じました。しばしば聞くことですが、海岸を散歩すると、寄せては返す波を見ていると、人間の運命というようなものは、朝（あした）にあって夕べにひきいるということで、ちょうど波のようなものである。大海の波の一滴にも足りないような命である。そういうことも感じて、露のはかなきことを感ずるのであります。しかし、時によると、そう言うたものでもない。その大海の水、その大波というものが、ただ波の頭のこの一粒の泡のために働いているのでないか。つまりこの一粒の泡のような波野の背後には、無限の大海が働いているのである。こういうようなことも感じました。自叙伝として、甚だ貧しいのですけれども、とにかくそういうようなことで、山河大海というようなものによって、我々は無限感情というものを与えられる。

しかし、もう一つ無限という感情を私に与えたものは、月の夜であります。かつて御影の常順寺というお寺で『教

行信証』の講義をしましたが、『信巻』の終わりに、阿闍世王が道に入ることを叙述してある。そこに月愛三昧ということがある。そこを読みながら、月の光というものが、いかに我々に悠遠な無限感情というものを与えるかということをつくづく思うたことがあります。

『教行信証講読』だけでなく、私の著作にしばしば出しているのですが、月の光と申しますと、広島におりました時分にもあります。田舎のお寺へ行きまして、そして話をして夜に宿へ帰る。その月の夜の晩に田舎道を歩いた時の感じ。今でも思い出すのであります。何か寂しい。寂しいけれども親しめる。真に無限なるものというものを我々に与えるものは、昼の光ではなくて夜の光であるに違いない。こういうことを、今でも思うのであります。悠遠という言葉がありますが、「悠」という文字の通り、奥深く、そしてはるかに感じられる。

それは、おそらく私だけでなく、西洋にもある。確かゲーテではなかったかと思いますが、我々にあの世というものを感じさせるものが月の夜であるということを言うていたと思います。あの世というようなものの感じは、恐らく月の夜でなければ感じられないことなのであろう。宗教心理学の書物を読みますと、宗教心理学としましても、月の夜、星月の夜というものが、宗教感情を育てるのであると言うております。そうしますと、真に無限という感情を与えるものは、昼の光でなくて夜の光であるといってもいいのであろう。「昼には昼の暗さがあり、夜には夜の明るさがある」ということも言われておりますが、昼の光では見ることのできない、その無限なるものを与えるものが、星月の夜の光である。こう言うことができるのではないだろうか。

天文学というものは、今ではもちろん昼も勉強しているのでしょうけれども、おそらく天文学の始まりというものは、月の夜が教えたのであろうと思うのです。もし世界に、太陽の光と違って、夜の光というものがないならば、天文学というものもなかったかもしれません。また、たとえ今日、月の世界へ行くことが出来るようになりましても、真にその月の持っている無限なるもの、こういうものはとうてい出てこないに違いない。人間の知識で考えて行く所

の宇宙は、どこまで行っても、人間の知識に知られている限りであるから、やはり有限なのでありましょう。
何かの書物で読みましたが、中国の人が「日本人は夜を無駄にする」ということを言うております。私は早寝ですから、私の気に入っている言葉です。いつまでもいつまでも夜起きていて、そして明かりをつけて仕事するというようなことは、夜を無駄にするんだと、中国の人が言うています。夜こそ人間が本当に宇宙の無限なることを感じ、人間のありかたを味おうていかなければならない。その夜が来ているのに、その時まで仕事をしていたのでは、せっかくの夜を無駄にするんだと。私が気に入っている言葉です。
そのように、私は星月夜の光というものに無限感情というものを育てられた。しかし、それは私が、ということでありまして、現に無限感情を感じさせるものは、やはり月の夜でなくて、日光のもとで、ということもありましょう。太陽の光のもとにおいて、もの皆活々としているものを見ると、そこに宇宙の、そして自然の無限なるものを感じる事ができる。そういうこともありましょう。
無限感情というのは、いかなるものであるか。こう言いますと、そういうような意味におきまして、我々の無限感情というものは、要するに自然によって与えられたものである、こう言える。自然の恩恵というものをわかれば、昼でも夜でも、あるいは広大な所でなくて、自分の家のように、わずか幾坪にも足らないような所であっても、そこに無限というものを感ずることができる。こうして、私たちは無限感情というものを育てられているのであります。
さて、次に申しておきたいことは、そういうふうに、自然を問うということ、これが東洋の思想であると言われていることです。東洋の思想、例えば、『中庸』に「天の命これを性という。性にしたがう、これを道という。」とあります。「天」は、すなわち自然、自然を代表しているものでしょうが、天の命にしたがっていくということが、それが人間の本性というものである。本性にしたがっていくのが、それが道というものである、こういうふうに言われております。そうしますと、「道」とは何であるかというと、自然にしたがうことである。こういうことである。

仏教にいたしましても、『大無量寿経』に「道の自然なるを念ぜよ」というてあります。自然、道というものは自然に従うということにある。それに対して、人為、人間の分別がある。かれこれ考えることは、我執というものであって、したがって道は自然にあるという教えは、無我ということに自ずから連なるのでありましょうか。

さて、東洋と申しますと、何よりも中国の思想ですが、私たちの教養は、ことに儒教というものに育てられたのであります。と申しましても、中国哲学はこうであるというようなことを言う能力は私は持っておりませんが、『易経』というものがある。『易経』というものは、天の運行、地の生成、みなそういうふうに、なるようになる、ということが言ってある。めぐりあわせというものがあって、そうなるようになっているのが、それが自然である。こういうふうに言ってあります。

もっとも、西洋の思想におきましても、自然というものを尊んでいるものが多いに違いない。それは西洋の思想といっても、広いことですから、そのいちいちは知りませんが、ここで自分の思想の遍歴として、一つ申してみますと、エマーソンに『自然論』というものがある。私はある事情によりまして、エマーソンのものを愛読したことがあります。その事情も話してもいいかな。私は友情というものを学生時代に考えたことがあります。私は友情というものへの関心が、相当にあったのです。先輩に対しましても、また同窓に対しましても、友情というものはいったいどういうものであるかということを考えたのであります。自分の思うておる所を、もっとはっきり言ってくれるものがないかと思っておりました時に、エマーソンに『友情論』というものがあった。それを断片的でありますけれども、読みました。それが手掛かりになりまして、『自然論』を読んだ。『自然論』は、今岩波文庫からも出ております。これは、なかなかいい書物であると思います。その中で、一つおぼえておりますが、部屋にいて書物を読むということは、実は退屈だからなんだ、とあります。本当の勉強ができない時に、まあ退屈だから本でも読むかということなのである。本当に元気があったならば書斎を出て、天地自然を見よ、そこに原典がある。この大自然と交わって、そしてものみ

なを見ていくところ、そこに原典がある。こういうことを言うている。これは、たいへん面白いですな。無字の聖典と言いますか、原典というものは、書いていないのが本当であるかもしれません。そういうようなことをエマーソンは『自然論』で言うております。自然というものは、決して物質的なものではない。精神の働きになるもの、それこそが本当の自然である。こういうことを言うでいるのです。

さて、東洋思想というものが、全て自然の大道を説こうとするものであるということにつきましては、いろいろ申してみたいことがあるのですが、清沢満之先生に『宗教哲学骸骨』というものがある。その第一章の中に、宗教というものは、無限感情に対応するものである。有限者が無限者に対して帰依し、そして無限の徳を受用するものが宗教である。こう言うてあります。清沢先生自身が書いた本を教科書にして、講義されたものでありますが、その自分の本に、上へも下へも縦横無尽に書き入れがしてあるのです。その書き入れの中で、その無限なるものとは何であるかということについて、あらゆる思想の根本的なものが並べてあります。無限なるものとは、「本質」である。「実際」である。「無碍」である。「絶待」である。「理想」である。「不可知的」である。「無覚、太極、真如、天、神、理、一、妙法、真理、本体、仏性、法性、如来、不可思議、阿弥陀」と、こういうふうに、無限なるものを、あるいは万物の「本質」というてみたり、「実体」というてみたり、あるいは「絶対」というてみたり、あるいは「不可知的」というてみたり、いろいろな言葉で言い表わしてあります。それがつまり無限なるものであるといっておられます。そうしますと、清沢先生の頭では、こういうところで統一されておるのでありましょう。儒教で「天」というも、そして仏教で「阿弥陀」というも、結局、無限なるものを言い表すということにおいて同じことである。しかし、言葉が違うのだから、言葉が違うだけ、表そうとするものが違うことは、それはもちろん心得ておかなければならない。その無限なるものを「不可思議」と言い表した場合と、「妙法」と言うた場合と、「神」と言うた場合と、「真如」と言うた場合と、それぞれの言葉の持ち味の違うことは、もちろん忘れてはならないが、結局一つなんだ。こういうふ

うに言うておられます。これはまあ、清沢先生も、やはり知識人でインテリであるということがありましょう。今でも知識人はこういうふうに言う。あるいは私たちもそうです。それはそれでもいいのではないかと思います。大日如来と言うも、阿弥陀如来と言うも、観音様と言うも、皆一つなのではないだろうか。

日本が戦争に負けて、宗教法案というものを書き換えなければならない、宗教に対する考え方を改めなければならないということで、名前は忘れましたが、アメリカの人が、京都へ来た。そして中外日報の真渓涙骨という人が、自分たちの宗教法案についての意見を述べたいから、各宗のお偉い方を集めて、そして一つ聞いていただきたいということを計画された。よろしいということで集まりがもたれた。私はその初めから招待されたわけではないのですが、前の日に私の家に走り書きが来て、こういうことがあるから君も来ないかということで、ちょっと聞いてみようかというくらいの気持ちでそこへ行ったのです。

それで、あの時分ですから、みんな敬意を表して、別に何を質問するということもなかったのです。けれども私はこんな人間ですから、「時に聞いてみたいのですが、いったい宗教法案をお作りになる方が、宗教とはどんなものだと考えておられますか。私らには私らとしての考え方があるのですけれども、どうも世の中の人の宗教という考え方は、道徳でもないし、文芸ではないし、そういうものではないが、とにかく精神生活的なもの、精神生活として芸術で言うてみようもないし、道徳において見ようもない、そういう何かわけの分からないものを、全て宗教という中へ持ち込むつもりでありませんか」と、こう尋ねた。そうしたら変な顔をされましてね。それで、そこにいた佐々木惣一さんでしたかな、助け船を出してくださった。「いや、君の言うことも分かるけれども、とにかく我々は、拝むものさえあれば宗教である」と、こう答えられた。これは名答である。私は今でもそう思うております。なるほど拝みさえすれば宗教である。そうすれば、花を拝めば、花は仏様に違いないし、月を拝めば月は仏様に違いない。そういう点から言えば、拝むものを持っておれば、みな宗教である。今でもやはりそうでしょうね。宗教とは何ぞやときけ

ば、そこらあたりの答え方をするのではないですか。

そうしますと、清沢先生の言うような、ものの本体だとか、不可思議なものであるとか、全てみな、というそれが即ち宗教である。阿弥陀というも、その意味において自然である。『宗教哲学骸骨』では、「阿弥陀」という言葉が一番最後に並べてあるのですが、その阿弥陀ということも、要するに無限者、無限なるものということよりほかないわけである。

これは、おそらく今でもインド人に話せば、何の疑いもなく、そうだと言うだろうと思います。宗教とは南無阿弥陀仏ということでしょうね、こう言えば、はいそうです、と。はいそうです、というのでないならば、インド人ではないと言ってもいいかもわかりません。「アミダ」という言葉は、大いなるもの、偉大なるもの、素晴らしいものという意味において、インド人は今でもみんな使っているのであります。あるインド人が、九州の阿蘇山に登って、両手を天上に上げて、「おおアミダー」と言ったそうです。亡くなられた権藤正行君が、そのことを手紙で教えてくれました。そういうことをインドの人が言うたそうです。そのことに権藤君は喜んで、阿弥陀ということは無限なるものであるということが、よく分かるのではないか、と。「ア」という言葉は、日本では天を仰ぎ見て、口を開いたときに発する音だから、「ア」という言葉が、すでに無限ということを表わすのではないか、と私に手紙をくれたことがあります。そういうことかもしれません。西洋にもそういうことがあるのかどうかとも思いますが、とにかく、東洋の思想というものは、無限なるもの、そしてそれを統括すれば阿弥陀ということである。こういうことになると言えましょう。

それで私一つ思い出したことがある。それは、「天地人の三才」という言葉があります。『三才図絵』という本もあります。天と地と人。天と地と、そして、その間に人というのがある。その天というものは何であるか。「光は天より降り、恵は地より湧く」という言葉がある。これは佐々木月樵先生の『親鸞聖人伝』に出ている言葉です。この言

葉は、佐々木先生ご自身のお作りになった言葉か、あるいはどこかにあるものに拠られたのかわかりませんが、「光は天より降り、恵は地より涌く」。やはり、こういうことでしょうね。そうすると、それは阿弥陀でしょう。阿弥陀は光明無量・寿命無量と言います。光明無量とは、「光は天より降る」ということでしょう。寿命無量とは、「恵は地より湧く」ということであるに違いない。寿命とは、大地の感覚であります。光明というのは、天上の感じである。これは、そうでしょうね。どれほど人間が進んでいきましても、元の考えは同じことでありますから、「阿弥陀」という文字の解釈を読んでごらんなさい。『阿弥陀経』には、「彼の仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに、障碍するところなし。このゆえに号して阿弥陀とす」とあります。天の主体の時には、光明無量のゆえに阿弥陀と名づくと、こう言うてあります。ところが寿命無量の時にはそうではありません。「彼の仏の寿命およびその人民も、無量無辺阿僧祇劫なり、かるがゆえに阿弥陀と名づく」。寿命無量の時には、彼の仏の寿命及び国土人民も無量無辺である、と。つまり育てられる衆生を含めてということでなければ寿命ではない。だから迷える衆生のあらん限り、仏の寿は尽きない。これは『阿弥陀経』だけではありません。『涅槃経』を開いてもそうなっております。あるいはその他の大乗の経典を読みましても、寿命ということを言おうとする時には、必ず衆生を含めている。そして地上の生々としたもの皆を見ることによって、そこにいのちというものが感じられる。天地の恵みを受けて、そこに人間の生活というものがある。こういうことです。

今朝もふと思うたのですが、自然の大道ということをいう東洋人の思想は、どうも植物的ですな。植物的人生観というものを感じます。それに対して、第二の人生観として話そうと思うておりますことは、どうも動物的なものがあるように思います。このことは、その時に譲りますが、その東洋の思想というのは、あくまで自然の大道であって、その自然の道理に背くということが、そもそもいけないことであるということで貫かれております。そこから出てくるものが何であるかというと、楽天的運命論である。私はこういう具合に考えているのです。

運命というものは何か暗いもののように考えていますけれども、しかし自然の大道を説く人々の思想の運命論は明るい。運命に対して明るい。楽天的である。中国哲学で、私は陽明学の本をだいぶ読んでみたことがあります。陽明学の原典も読んでみたのですが、近いところでは、日本の大塩平八郎の『洗心洞箚記』、佐藤一斎の『言志録』、こういうものを読んだことがあります。佐藤一斎の『言志録』というものは、私らの学生時代には、一度読んでおかなければならない書物のように勧められました。そしてまあ、愛読した。まあ、愛読というような言葉よりは、むしろ敬読だなあ。敬って読むという、そんな書物の一冊であったのです。それを見ると、開巻筆頭に「凡そ天地間のこと」、「人の富貴貧賤・死生寿夭」などは、全てみなこれ予め定まっているのである、とあります。これは言えば、決定論です。もうそうなるように出来ているのであると。春の次には夏が来、風が吹けば雨が降る。そうしまいとしても、そうなっている。こういう時には地震があるとか、こういう時には津波が出るとかと、その天地の運行は、全てのことが予め決まっているのである。これと同じように、人間が生まれるとか、生きていくとか死んでいくとか、貧しいとか富めるというようなことも、達者であるとか病気であるとかいうことも、全てみなそういうふうに出来ている。そういうふうに出来ているものであるから、くよくよする必要のないものはない。そうであることがわからなくて、何か人間の力でどうにかなるように思うていることがそもそも間違いである。悲観するのは、人間が自分のはからいをまじえる所にあるのであって、本当に自然の大道というものがわかれば、あるがまま、それでよいのである。こういうことが述べられています。私はそれを、楽天的運命観と呼んでおります。

その楽天的運命観というもの、これが自然の大道を説く人に共通するもののようであります。たとえば、先ほど話したエマーソンに、やはり『運命論』というものがある。これも愉快な本であります。どんなことがあるか、細かいところは忘れてしまったけれども、これも極めて明るい。人間は、どうなるかということは決まっている。だからその運命の日がこなければ、どんなことがあっても死ぬことができない。死のうと思っても、運命の日が来なければ、

死ねない。そのかわり、運命の日が来たならば、どうしても死ななければならない。こういうことです。

そういうことを思いますと、そこまでいけば、我々はやはり清沢先生を思い出します。清沢先生の絶対他力論というのは、結局は、自然の大道、道は無限の大道であるということに尽きるのではないだろうか。『絶対他力の大道』に、

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり。

とあります。「自己とは他なし」、この「自己とは他なし」という言葉が自己から出発するのは、第二の人生観であると私は言いたいのですが、しかし、「自己とは何ぞや」という問題を出しながら、「絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」というてあります。その「絶対無限の妙用」とはいったい何であろうか。清沢先生のお書きになったものにも、なるようにしかならないんだと、どこかにこれがあります。人生のことはなるようにしかならない、そのなるようにしかならないということがわかれば、それは絶対無限の妙用なのである。そうせしめられたものである。そうならしめられたものである。こうなったならば、「死生の事、亦た憂うるに足らず」。死ぬ時は死ぬのだし、生きる時は生きるのだし、と。

ちょうど良寛にも同じことがある。「死ぬる時節には死ぬがよく候」と、こういうふうな思想が出てくる。自然の道理に従えという、この自然哲学というものは、悲観的な感じを与えることがないのであろうか、とも思われますが、自然と運命というものを問題とし、ともかくその自然の大道を説く人は、楽天的である。死をはかなんだり、死を悼んだりするということは、結局自然の大道を知らない、そうなっているんだということを知らないからである。こういうふうに言ってあります。

昨日も申しましたように、私達の考え方は、そういうように、道は自然にある、ということにおいて育てられたものである。これから第二第三の人生観の話を進めるのでありますけれども、そこにもこの第一人生観というものを離

れることができない。そういう意味において、清沢先生の思想なども、よくよく考えてみなければならないものがあるのではないであろうか。こう言いたいのであります。

しかしながら、自然観は必ずしも楽天的であるはずはない。こういうことで、ここに一つの反省がなくてはならない。そこからもうひとつ第一人生観というものを考えてみる。第一人生観とは、どういう点において考えてみなければならないものであるか、ということであります。これはその次の問題なのですが、自然と人間ということを話しながら、それにもかかわらず、人間の思想というものには、何か東と西との違いというものがある。東洋と西洋の違いというものがある。東洋の思想は、第一人生観で、自然から来ているものでありますが、西洋の思想は人間から来ている。こういうことを言いたいのであります。

しかし、そこへ移る前に、東洋の思想、自然観と言いましても、これは必ずしも楽天的な一筋の道ではないと思われる。同じ東洋の思想としましても、南方と北方との違いということが、まず問題になりはしないであろうか。

これも中国の文学などを読んだ時に教えられたことでありますが、中国の南方の思想と北方の思想とは違う。揚子江を挟んで、南の方の思想と、北の方の思想とは違う。北の方の思想は、どこか二元的である。あるいは二面的である。中国の文学のことで話せればいいのでしょうが、私には知識がないからそれだけにいたしておきますが、こんな小さい日本におきましても、私たちのように北国生まれの人間と、南で育った人とでは、やはりものの考え方が違うようです。それは、あなたたち、友達の間で話してごらんなさい。南生まれの人はどこか明るいでしょう。運命に対して非常に明るい。しかし北国生まれの者はどこか暗いところを持っている。曾我先生でも私もそうですが、初めて京都へ出て、そして話した時のことですが、私の話を暗いと言うた人があります。ことに曾我先生の話も暗いと。私は少しは明るい話もしようと思っていたのですが、曾我先生は正直な方ですから、暗いことは暗いと、こう言い放しである。まあ、世の中というのはおもしろいものですね。私に、もう一度あの時の暗い話をしてくれないかという注

文があるのですけれど、どうもそうはいかない。私もそうとうに明るくなったのでしょうな。そういうことからしますと、自然というものも、我々をただ楽天的にさせるものであるだけではなくて、何か悲しいものを感ぜしめるものもあるようであります。

狭い日本ですけれども、その狭い日本でも布教して歩きますと、地方性というものがあります。東北の人の求道と北海道の人の気持ち。あるいは日本海に臨んでいる、ことに山陰の方の人たちの信仰状態と九州の人の気持ち。こういうふうに見ますと、地方性というものが、思想の意味から表れているということを思います。結局、道は自然にある、運命を悲しんではならない、運命に絶望してはならない、こう言われることは聞いて済むこと、共通することなのでありましょうけれども、それにもかかわらず、それだけで済まされないものがやはりある。何かそういう点において、地方性というものがあるということは一つ考えてみなければならないことではないだろうか。

これは専門の仏教学者に聞いて、それは君間違っていると言われればそれまでですけれども、インドの仏教でも、南天竺に生まれた龍樹の思想と、北天竺に生まれた世親菩薩、無着という人の思想とは、何かそこに色彩の異なるものがあるのではないだろうか。龍樹の縁起の思想、空観。これは何か明るい。『般若経』の思想というものは、つまり思想は一枚であって、そこに明るさというものが感じられる。唯識の思想というのは、どうしても二枚になっているのではないでしょうかね。何か「我」が二重になっていて、現に働いている「我」と、もう一つ隠れている「我」と。それでなくては唯識というのは成り立たないのではないだろうか。

こういうことを考えますと、道は自然にあるということを、否定するわけではありませんが、しかし、道は自然にあるという立場において、またそこにいろいろ考えてみなければならないものがある。我々はそこで、道は自然にあるという第一人生観の限界というものを明らかにしなければならないと思うのであります。

（本稿は、一九七三年五月八日の大谷大学における集中講義「第三の人生観」の筆録である。文責編集部）